

村石 達哉 (ヴァイオリン) *Tatsuya Muraishi (Violin)*

5歳よりヴァイオリンを始め、武蔵野音楽大学、同大学院、ベルリン国立芸術大学に学ぶ。SFBラジオ第2放送、ドイツ、イタリア、スウェーデンにおいてリサイタルを開いた後、95～96年にドイツのオーケストラ"エルブランド・フィルハーモニー"の首席コンサートマスターを務め集客力がなかった楽団を再生し惜しまれながらも退任しその後ソロ活動に移りヨーロッパを中心にオーケストラと共演、音楽祭出演、客演指揮を行い99年に帰国し現在に至る。バロックヴァイオリンの奏者としても研鑽を積み、中国ツアー、米国ツアーを行った。バロック音楽の視点からの作品の演奏解釈を行いアカデミックな表現法を試みている。またそれが認められ2013年にはインディアナ大学の招聘を受け演奏。2015年より毎年ベルリンでのリサイタルを再開し、またオーストリアのオツタールで夏に行なわれている音楽祭のマスタークラスの講師を毎年務めている。

綿貫 舞乃 (ヴァイオリン & ヴィオラ) *Maino Watanuki (Violin & Viola)*

3歳よりヴァイオリンを始める。これまでに伝田充正、村石達哉、マリアンネ・ベッチャー（ベルリン芸大教授）、ハルトムート・オメッツベルガー（ウィーン）の各氏に師事。ドイツ・ラインスベルクとオーストリア・オーバーグーグルのマスタークラスに参加し、共にファイナルコンサートに出演する。15年,16年,17年,19年ベルリン及びオーストリアでのコンサートに出演し好評を得る。18年にオーストリアのグラーツにてヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲を室内オーケストラと共に共演。19年にウィーンのカプツィーナ教会にて演奏会を行った。メセナジュニアオーケストラを経てメセナ市民交響楽団のメンバー、コンサートミストレスを務める。現在、ウィーンと日本での演奏活動と共に後進の指導も行っている。T&M音楽企画の専属アーティスト。

クリストファー・聡・ギブソン (チェロ) *Christopher So Gibson (Cello)*

4歳よりチェロを始める。高校在学中にTanglewood, Indiana University, Interlochen の夏期プログラムに参加。横浜インターナショナルスクール卒業後、2005年に米イェール大学に進学、哲学・政治学を二重専攻。在学中、Aldo Parisotとのオーディションに合格し、イェール音楽院にてメニューイン氏との共演を果たしたOle Akahoshi氏にチェロを、Wendy Sharp氏に室内楽を師事する。2011年秋にイェール大学卒業後、哲学、文学、芸術を通して英語を教えると共に、チェリストとして東京・鎌倉を中心に活躍中。2012年冬、国際演奏家協会新人オーディションにてバッハ無伴奏ヴァイオリンパティータで入賞した際、審査員の一人であるヴァイオリニスト川島成道氏から「曲の世界に入り込むことの出来る演奏」という賛辞を受ける。

山田 亜理沙 (ピアノ & チェンバロ) *Arisa Yamada (Piano & Cembalo)*

東京学芸大学卒業、武蔵野音楽大学大学院修了。ドイツ・ベルリンにて研鑽を積み。スタインウェイ国際ピアノコンクールin Berlin入賞、ベルリンフィルハーモニー室内楽ホールにて演奏。鹿児島新人演奏会出演、最高位である県知事賞受賞。大阪国際音楽コンクール アーリーミュージック部門(チェンバロ)入選。ポーランド国立クラクフ室内管弦楽団と共演。モーツァルテウム音楽院、バリ国際音楽アカデミー他、国内外のマスタークラスや音楽祭に参加。ピアノを中野孝紀、丸山淑子、チェンバロを西山まりえ、オルガンを石丸由佳の各氏に師事。現在、東京を拠点に、室内楽や歌曲・合唱伴奏に積極的に取り組む傍ら、後進の指導も行なっている。近年はチェンバロ演奏にも力を注いでいる。武蔵野音楽大学伴奏助手(指揮科)、洗足学園音楽大学演奏要員。

5th

Christmas Concert

クリスマス・コンサート



ピアノ四重奏の調べ

2021 12.23

長野市芸術館 リサイタルホール

Program

コレッリ
合奏協奏曲 ニ長調 Op.6-4

ベートーヴェン
ピアノ四重奏曲 第3番 ハ長調 WoO 36

～ 休憩 ～

ハイドン
ロンドン・トリオ 第2番 ト長調 Hob IV-2

フォーレ
夢のあとに Op.7-1

フォーレ
ピアノ四重奏曲 第1番 ハ短調 Op.15



合奏協奏曲 第4番ニ長調 Op.6-4 コレッリ

コレッリは、バッハ、ヘンデル、ヴィヴァルディの少し前の時代に活躍したイタリアの作曲家です。彼自身ヴァイオリンニストだったこともあり、ヴァイオリンを中心としたソナタや協奏曲が主要な作品となっています。その中で最もよく知られているのが、この12曲からなる合奏協奏曲集です。合奏協奏曲というのは、少数のソリストと合奏グループを対比させながら曲が進んで行くバロック音楽を代表する形式です。この作品6では2つのヴァイオリンとチェロが独奏楽器として選ばれています。ちなみに作品6の第8番は昨年の第4回クリスマスコンサートで演奏した「クリスマス協奏曲」です。

- 第1楽章 アダージョ / アレグロ 4/4
- 第2楽章 アダージョ 4/4
- 第3楽章 ヴィヴァーチェ 3/4
- 第4楽章 アレグロ 2/4
- 第5楽章 アレグロ 4/4



intermission

休憩

ピアノ四重奏曲 第3番 八長調 WoO 36 ベートーヴェン

3つのピアノ四重奏曲 WoO36はルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンが1785年にピアノと弦楽のために作曲したピアノ四重奏曲です。

この作品はベートーヴェンの最初期のボン時代に作曲されたものですが、ベートーヴェンの死後になって出版されました。その際、その完成度の高さから14歳の作品とは思えず、フェルディナント・リースをふくむ音楽家たちを驚かせたと言われています。

この曲ではベートーヴェンの最初期の他の作品にも見られるように、全体的な楽章構成や調設定、テンポ、主題や和声構造などの多くの点にモーツァルトの影響が見られます。また、後に最初の出版作品の2つとなるピアノ三重奏曲第1番、第2番、第3番 作品1と、ピアノソナタ第1番、第2番、第3番 作品2の中に、この曲の主題素材や楽節が取り出されています。

今回演奏する第3番はモーツァルトのヴァイオリンソナタ 八長調 K.296をお手本に作曲したと言われています。

- 第1楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ 4/4
- 第2楽章 アダージョ・コン・エスプレシオーネ 3/4
- 第3楽章 ロンド 2/2

ロンドン・トリオ 第2番 ト長調 Hob IV-2 ハイドン

ハイドンは生涯で2回ほどロンドンを訪れていて、その2回目の滞在中に、彼の有名な交響曲「驚愕」「軍隊」「時計」を書いています。この「ロンドン・トリオ」シリーズは、その頃パトロンのフルート愛好家の男爵と交流があり、彼の為に書いたのだろと言われています。

全部で4曲から出来ていますが、今回はその中から第2番をヴァイオリン2本とチェロで演奏致します。

- 第1楽章 アンダンテ 2/4
- 第2楽章 アレグロ 2/4

夢のあとに Op.7-1

フォーレ(1845-1924)

「夢のあとに」はフランスの作曲家、ガブリエル・フォーレが1878年、33歳の時に作曲した歌曲「3つの歌 作品7」の第1曲です。歌曲が原曲ですが多くの楽器のために編曲され、親しまれている作品です。今回はチェロによる編曲でお楽しみ下さい。

ピアノ四重奏曲 第1番 ハ短調 Op.15

フォーレ

フォーレは1845年にフランス王国のパミエで5男1女の末っ子として生まれました。彼は幼い頃から教会のオルガンに親しみ9歳から音楽学校に通い始め、16歳の頃には教師として赴任して来た若き日のサン=サーンス（10歳違い）にピアノと作曲を学びました。

彼の作品は室内楽曲に名作が多く、ピアノ四重奏曲 第1番（作品15）は1876年から1879年にかけて作曲されました。ヴァイオリン・ソナタ、第1番（作品13）と同じ時期（1876年）に着手されましたが、同年末に結婚する予定であった婚約者に婚約を破棄され、大きなショックを受け、完成したのは1879年。初演は成功に終わったものの、初演後に最終楽章が書き直されたため、最終的な形になったのは1883年でした。（ちなみに1883年に結婚した後も他の女性との関係があり、後にドビュッシー夫人になったエンマとも関係があったと言う事です。）

フォーレの初期の作風は旋律を歌わせるにはユニゾン（同じメロディーを同時に複数の楽器で奏でさせる）で、伴奏はアルペジオ（分散和音）が多用される。また突然の転調を多く用い、音色と調性上の試みを多く取り入れています。

（フランクは23歳年上。マスネは3歳年上。ドビュッシーは17歳年下。ラヴェルは30歳年下。）

- 第1楽章 アレグロ・モルト・モデラート
- 第2楽章 スケルツォ アレグロ・ヴィーヴォ
- 第3楽章 アダージョ
- 第4楽章 アレグロ・モルト

Program Note

